

Title	古版経済書解題 シモンド・ツ・シスモンディの『経済学新原理』其の他
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.6 (1935. 6) ,p.855(109)- 868(122)
JaLC DOI	10.14991/001.19350601-0109
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350601-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350601-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上、プライス、パーク及びペインの三者が説く處を顧るに、その中心問題は、王權と民權の關係如何に置かれてあるが、この事が這個の論争を以て、急進運動の第二期に入れる事を示すものとする所以である。これは表面上憲法論争であるが、その本質が土地を基礎とする貴族制の攻防戦であることは、一見して分明である。それなればこそ、争ひは三人に止らずして、實に多數の論者が登場し、次の機會に敘する如き、殆んど未曾有の政治論戦が展開されたのである。茲に述べたのは、眞にその序幕に過ぎないのではあるが、この序幕に登場せる三人は、いはゞ千兩役者たる人々であつたが故に、之を詳論するの必要を、筆者は認めたのである。併し同時に、如何に千兩役者が登場したとは云へ、序幕たることに變りはない。従つてフランス革命論争の分析的解明は、之を通觀したる後に譲ることとし、此處は單なる紹介的記述を以て擱筆する。

## 古版經濟書解題

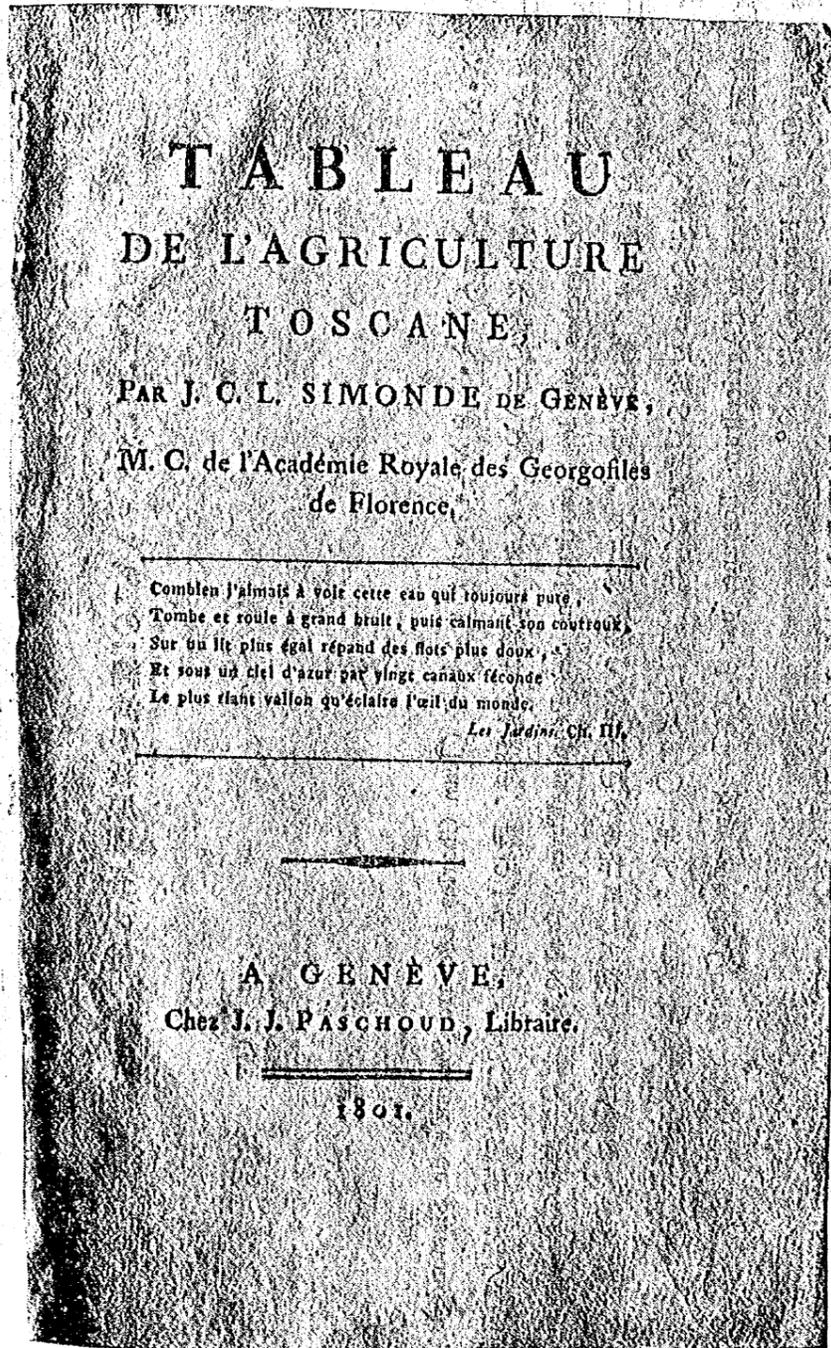
シモンド・ヅ・シスモンディの『經濟學新原理』其他

高橋誠一郎

### 一

ジャン・シャルル・レオナルド・シモンド・ヅ・シスモンディ (Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi) の處女著は、彼れが其の一家の不幸に由つて、トスカンに移住した翌年、即ち一千七百九十六年に起稿した『自由民の憲法に關する研究』(Recherches sur les Constitutions des Peuples libres) であるが、此の著は彼れをして五個年の歳月を費さしめたに拘らず、遂に未完成、未出版に終つた。彼れの著作にして初めて世に現れたものは、一千八百一年、其のトスカン在住の終りに於いて著され、其の翌一千八百〇一年ヂュネーヴに於いて上梓せられた『トスカンの農業略圖』(Tableau de l'Agriculture Toscane, par J. C. L. Simonde de Genève, M. C. de l'Académie Royale des Geographes de Florence) である。

此の書は農業の實際に關する描寫的説明的の著作であつて、單に少數の經濟的意見を包含するに過ぎない。彼れ



頁題表『圖略業農のンカスト』版年百八千一 圖一第

は此の著に於いて、トスカンに於ける種々なる耕作法を平和な筆致に描いて、生々とした繪畫を讀者の眼前に示してゐる。其の後、長く彼れの心を捕ふるに至つた純収益及び總収益の問題に對する彼れの意見は、夙に此の著中に於いて、其の暗示を看出す。彼れは當時既に粗放農業に對して小農場の耕作を愛した。彼れは大農業は小農業に比して大なる純収益を生ぜしむ可きであるが、而も總収益に關しては、小農業の優越せることは疑ふ可らざる事實であると信じた。彼れは確然總収益に與するものではないが、而も彼れが幾分之れに傾いて居つたことは疑ひなき所である。總収益の増加は更らに大なる人口を養ふ可きが故に、願はじきものである。即ち彼れ曰く「何が故に、唯だ一箇の富裕なる農業者の利得は、幾千の勞働者及び小農民の乏しき收得よりも國家に取つて有利なりと考へらるるか」と。(ibid., p. 191-192.)

次いで、彼れは一千八百〇二年、其の經濟學に關する最初の著作に従事し、一千八百〇三年「商業上の富に就いて」(De la Richesse Commerciale ou Principes d'Economie Politique appliqués à la Législation du Commerce)と題し、二卷に分冊して、デュネーヴに於いて出版した。當時の彼れは熱心なるアダム・スミスの學徒であつた。此の書の一定の諸章は既にアダム・スミスを熟讀せる如何なる人に取つても、何等眞に斬新なる思想を含有するものでないことを彼れは率直に告白してゐる。(ibid., t. I, p. ix.)。彼れは此の偉大なる蘇國經濟學者を尊敬するの餘り、近く佛蘭西の一州と爲つたデュネーヴ・カントンに彼れの學說の全部を悉く適用せんことを期したのである。(ibid., p. 12.)。此の英國哲學者の學說は、世人が其の確實を承認せしめらるゝことなくして了解することが出來ないほど、完全に基礎附けられ、如何なる種類の誇張にも陥ることなく、提起せらるゝ總べての問題に明瞭に答へ、其の後に起つたあらゆる事件によつて善く確證せられた云々。(ibid., p. 13.)。彼れは單に『國富論』が系統的

論述を缺き、了解至難であつて、了解せらるゝことなく、恐らくは讀まるゝことなくして引用せられ、而して其の含有する知識の財寶が政府の利用する所と爲らなかつたものと認めてゐるに過ぎない。(Ibid., t. II, p. 4.)

シスモンディは此の書を三編に分つて、資本、價格及び獨占を論ずる。此の著に現れた彼は諸利害の調和、自由放任の必要及び政府の干渉の愚を再説するに於いて鋭意なるものである。彼は極端なる自由貿易論者であつて、盛んに獨占、關稅、植民地の特權及び其の他保護の目的を以つてする諸規制に對して攻撃の矢を放つてゐる。彼の意見に據れば、是れ等の統制的法規は、國家の繁榮を増進せしめんとするの見地より出でて、却つて之れを妨害しつゝあるものである。商業にして自由に委せられんか、資本は自から之れを所有する國民に取つて最も有利なる方向を取る。(Ibid., t. I, p. 267.) 「總べての人は、彼れ等自身の利益を求むるに於いて、絶えず國民的利益に奉仕するの傾向がある」。(Ibid., p. 329.) 斯くて、「彼れ自身の利益を顧慮する資本家は常に國民の其れの爲めに働く」。(Ibid., t. II, p. 152.) 彼れを以つて觀れば、商業に對する自由は、實に、あらゆる政府が其の國民に賦與することの出来る最大なる利益である。近代歐羅巴の産業的發達に對する總べての障害の中で、最も有害なるものは、殆んど總べての立法者の愚學に於いて看出される。彼れ等は全然彼れ等の任務に非ざる商業を指導せんことを欲する、彼れ等は、自由競争に委せらるゝ時は、何等の努力なくして、一般的福利の實現に資する特殊利益の稱を彼れ等の手に支持せんと欲する。(Ibid., p. 144.) 然しながら、此の書中に於いてすら、シスモンディは猶ほ、「鋭感なる者は何人と雖も、國民中に於ける最も興味ある階級、即ち其の勞働の收果によつて全體を支持する所のもの」が、其の上の負擔たる人民と之れを分つが爲めに其の享樂を剝奪せらるゝことを悲みなくして見ることが出来ない」と叫ばなければならなかつた。(Ibid., t. I, p. 109.)

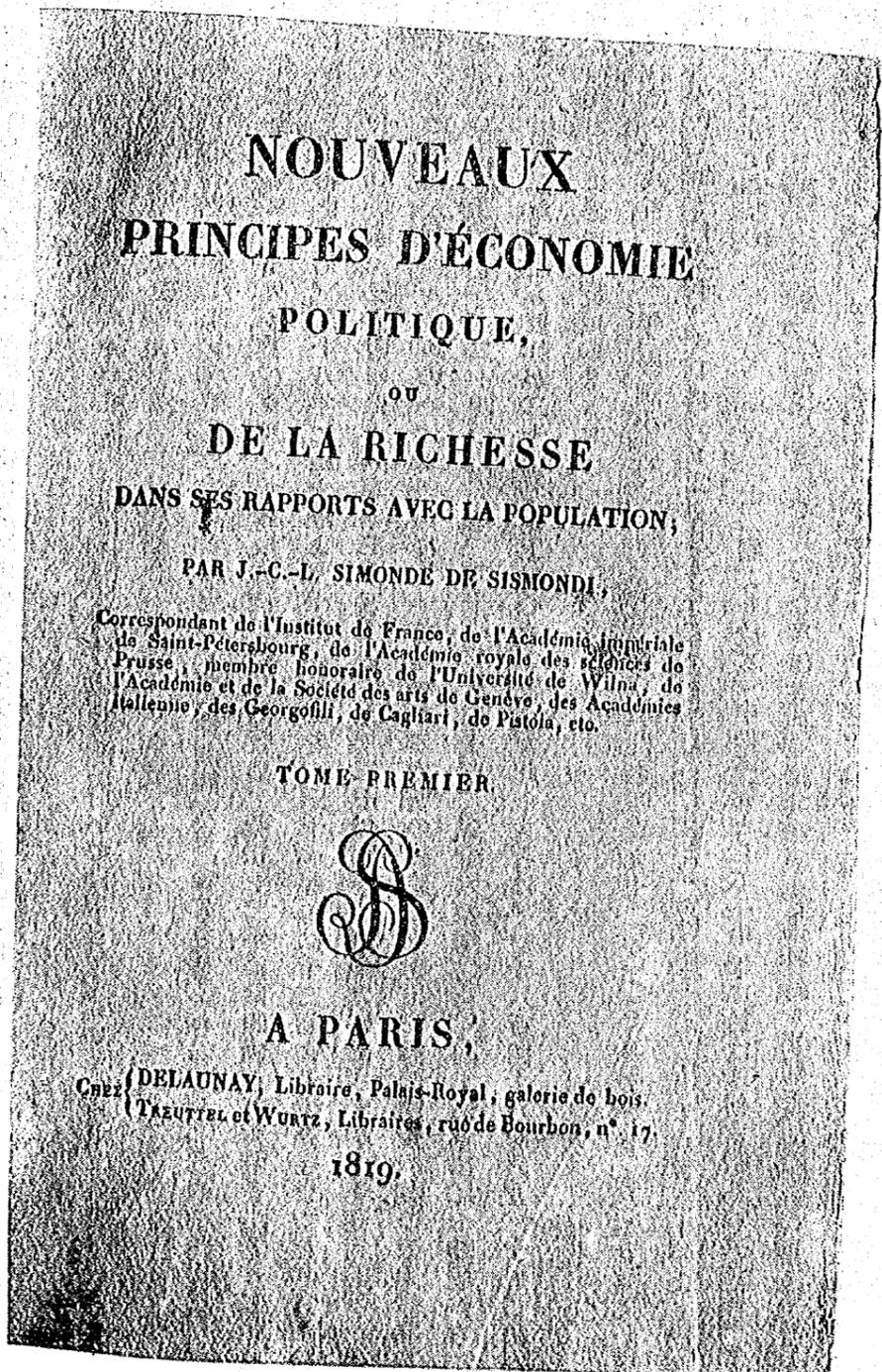
## II

シスモンディは此の書に由つて著しく其の名聲を高からしめ、西露ヴィルナの大學は其の當時空虛と爲つて居つた經濟學の講座を擔任せしめんとして巨額の俸給を提供して彼れを招聘したが、彼れは之れに其の心を動されながらも、終に斷乎として之れを拒絶し、其の大著『中世伊太利亞諸共和國史』(Histoire des Républiques Italiennes du Moyen Age)の業に着手し、一千八百〇七年、其の第一及び第二兩卷を佛獨兩國語を以つて出版した。此の出版の成功は續稿の上梓を容易ならしめ、翌八年を以つて第三及び第四の兩卷が出版せられた。而して彼れは一千八百〇九年、其の出版者たるツリーツヒのゲスナー(Gessner)の死亡に由り、ニコール(Nicolle)の手によつて巴里に於いて既刊四卷を新たに出版すると共に、彼れをして其の五卷より八卷までを出版せしむることとした。次いで一千八百十五年に至つて、最後の五卷、即ち第十二卷より十六卷までがツロイテル(Treutell)及びウルツ(Wurtz)の手によつて出版せられた。彼れは此の間に於いて、一千八百十一年の末から、十二年に亘つて南歐文學に就いてデュネーヴに於いて引き続き公開の講演を行ひ、一千八百十三年、ツロイテル及びウルツの手に由つて『南歐文學史』(Histoire des Littératures du Midi de l'Europe)四卷を出版した。

彼れは又、一千八百十五年にブリュスター博士(Sir David Brewster)の依頼を受けて、彼れが其の編輯を主宰せる『エジンボロオ百科全書』(Edinburgh Encyclopaedia)の爲めに英文を以つて『經濟學』(Political Economy)に關する一項を草した。彼れは此の項目中に於いて、近代の勞働關係及び自由競争の弊害並びに生産の過剩に關する彼れの經濟學體系の最初の概要を記してゐる。其の出版せられたのは一千八百十八年のことである。其の翌一千八百十九年に至つて、彼れの『經濟學新原理、別名其の入口との關係に於いての富に就して』(Nouveaux Principes d'Economie

Politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population) 二卷が巴里に於てデラヌー(Delaunay)書店及びツロイテル・ヴルツ(Treuttel et Wurtz)書店から發兌せられた。

彼れは其の『商業上の富に就いて』を著した後、十五箇年餘の間、經濟學上の書を読むことは極めて少なかつたが、而も彼れは事實を研究することを廢さなかつた。是れ等の或るものは彼れが會つて採用した諸原理に反するの觀があつた。(Nouveaux Principes, op. cit., t. I, avertissement, p. iii.) 此の時期に於いて、彼れは歐羅巴が過去數年間に經驗した商業恐慌、並びに彼れ自身が伊太利亞、瑞西及び佛蘭西に於いて目撃し、又一般の報道に従へば、英吉利、獨逸及び白耳義に於いて、少くも同様に不良であつた工業労働者の痛酷なる苦難に強く其の心を動された。(ibid., p. iv-v.) 前述の如く、彼れが『エジンボロ百科全書』の爲めに寄稿を求められたのは恰も此の時機であつた。彼れは斯くの如き新事實によつて自己の思想を再吟味するに及んで、彼れの到着した結論がアダム・スミスの其れと全然相違せることを看出さなければならなかつた。一千八百十八年から十九年に亘つて英國を旅行し、『爾餘の世界に教ふるが爲めに偉大なる經驗を嘗めたるの觀ある驚嘆す可き此の國家に於いて、生産が増加しつゝあるに反し、享樂が減少しつゝある』を觀た。此の地に於いては、國民の大多數は、富の増加が經濟學に於ける究竟目的ではなくして、總べての者の幸福を取得するが爲めの其の方便たることを忘却するに於いて哲學者等に劣らざるの觀があつた。(ibid., 2e édit., t. I, 1827, avertissement sur cette seconde édition, p. iv.) 自由放任主義が人間社會の幸福を増進せしむるの事實を永く確認すること能はざるに至らしめた光景は、此の學説が最も完全なる發達を遂げ、偉大なる力と權威とを以つて國民を支配しつゝある英國に於いて彼れの眼に映じたのである。彼れが『百科全書』に寄せた項目は爰に發達せしめられて其の『新原理』と爲つた。



頁題表『理原新學濟經』版年九十百八千一 圖二第

此の著は七編に分たれ、其の第一編に於いては、「經濟學の目的及び其の起源」、第二編に於いては、「富の形成及び發達」、第三編に於いては、「土地的富に就いて」、第四編に於いては「商業上の富に就いて」、第五編に於いては「鑄貨に就いて」、第六編に於いては「課税に就いて」、第七編に於いては「人口に就いて」論じてゐる。

三

シスモンディは一千八百十八年五月、其の畢生の大著『佛蘭西人史』(Histoire des Français)の準備に着手し、二十一年に至つてツロイテル及びヴルツから最初の三巻を出版し、翌二十二年には四巻より六巻までを、二十六年には七巻より九巻までを、二十八年には十巻より十二巻までを、三十一年には十三巻より十五巻までを、三十三年には十六、十七の兩巻、三十四年に十八巻、三十五年に十九、二十の兩巻、三十六年に二十一巻を刊行し、一千八百三十九年には伊太利亞ルッカのベッシア市に於いて起稿せる本書の抄録二巻を出し、歸國後、其の二十二巻を刊行し、次いで四十年に二十三、二十四の兩巻を、四十一年に二十五、二十六の兩巻を、四十二年に二十七巻から二十九巻までを出版した。而も彼れが二十箇年以上の心血を注いだ此の大著は、一千八百四十八年六月二十五日に於ける著者の死と共に終に未完成のままに残つた。

彼れは一千八百二十二年、教訓小説『ジュリア・セヴェラ、別名四百九十二年』(Julia Severa, ou l'an 492)三巻を出し、一千八百三十二年、ラードナー(Dionysius Lardner)のLardner's Cyclopaedia (一千八百三十年より同四十年に亘つて刊行せられたるもの、一百三十二巻より成る)中の一巻として『中世に於ける伊太利亞諸共和國』(Italian Republics of the Middle Ages)と題して其の大著『伊太利亞諸共和國史』の抄録を出版し、其の後、間もなく同一の抄録を Histoire de la Renaissance de la Liberté en Italie, et ses Progrès, et sa Décadence et, sa Chute. と題し

て佛文二巻として出版し、一千八百三十五年には『ラードナー百科全書』の爲めに『西紀二百五十年より一千年に至る羅馬帝國滅亡並びに文明衰頹史』(History of the Fall of the Roman Empire, and the decline of civilization, from the year 250 to 1000.)二巻を出版し、之れと同時に其の佛文をツロイテル及びヴルツから Tableau de la chute de l'Empire Romain et du déclin de la civilisation de l'an 250 à l'an 1000. と題して出版した。是れ等のものは、彼れが一千八百二十年から翌二十一年に亘つてデュネーツで開進した中世上半期の歴史と題する講演に基いたものである。

彼れは又、一千八百三十六年に其の『社會科學研究』(Études sur les Sciences sociales.)の第一巻として『自由民の憲法に關する研究』(Études sur les constitutions des peuples libres.)を出版した。彼れは經濟學の領域に於いては、常に無産階級に同情し、更らに平等なる富の分配に賛するものであるが、政治學の方面に於いては保守主義者と稱せらる可きものである。彼れは共和政治と民主政治とを峻別し、自己を以つて、自由主義者であり、共和主義者であるが、斷じて民主主義者ではないと稱して居つた。彼れは普通選舉に反對した。「吾人は飢えたる人の飢えを救ふが爲めに、努めて彼れに聽かなければならぬのであるが、而も彼れに耳を傾くる代りに、吾人が彼れから命令を受けるとしたならば、彼れの飢餓は全社會に對して飢饉を惹起す可きである。對立的利害から構成せらるゝ多數によつて行はれたあらゆる決議は、其の中の一の不當且つ殘忍なる犠牲を生ず可きである、總べて對抗的諸職業、雇主と職工、買手と賣手との間に於ける投票に訴ふることは、全然公平なる和解を來さしむるものではなくして、被征服者に對する征服者の勝利を與ふるものである。」(ibid., p. 109.)

彼れは其の翌一千八百三十七年並びに八年に前掲『社會科學研究』の第二及び第三巻として『經濟學研究』(Études

sur l'Economie politique.) を出版した。彼れは此の書の序文に於いて曰く「余は重大なる誤謬が、社會科學に於いて爲された餘りに頻繁なる概括から生じたことを確信する」と。(ibid., p. v.)

四

アダム・スミス及び其の學徒は富を以つて經濟學の主題と看做した。然るにシスモンディを以つて觀れば、「人間の物質的福利は、それが彼れの政府の專業たり得る限りに於いて、經濟學の目的である」。(Nouveaux Principes, t. I, 1819, p. 8.)。人間の福利と關聯せる他の社會現象より富を分離せんとするの舉は、眞理を齎すよりも、寧ろ誤謬に終り、而して福利其の者の上に不幸なる結果を來した。政治の學として、經濟學は總べての者に國民的繁榮の利益を保證す可きである。そは富者に對すると等しく貧者に對しても亦、生活の安易、快味及び平靜に參加するを得せしむ可き秩序を求む可きである。(ibid., p. 9.)。經濟學は仁愛の理論 (La théorie de la bienfaisance) であつて、「結局に於いて人類の幸福を増進するの結果を有せざる總べての理論は全然此の學に屬せざるものである」。(ibid., t. II, 1819, p. 248-9.)。

シスモンディは後の獨逸學派の創始者等が其の名を掲ぐることなきに拘らず、歴史的研究の開路者として特筆せらる可きものである。ロッシュャー及びヒルデブランドは全然彼れの名を擧ぐることなく、クニースは單に彼れを以つて一個の社會主義者と思惟してゐた。(Cf. Karl Knies, Die politische Oekonomie vom Standpunkte der geschichtlichen Methode, 1853, S. 223-4; Neue Aufl., 1883, S. 322.)。常に實際社會の事情を觀察することを怠らなかつた彼れの心は、單に系統的に演繹より演繹にと進み、嚴密なる數理的推論を以つて一系の抽象的命題を構成するの快樂のみを以つて満足することが出来なかつた。彼れは夙に其の「トスカンの農業略圖」に於いてすら其の卷頭に於いて「自然科學の趣味と研究とが歐羅巴に於いて復活し始めた時、新哲學者等は初めから理論を把握して之れを體系に歸せんとするの傾向があつた。彼れ等は經驗に代へて想像を求めた、而して彼れ等は彼れ等が學びつゝある可き筈の時に於いて教へんとした、彼れ等が這箇其の英才の進路たらしむ可く取つた其れを拋棄し、而して傾聴し、觀察し、學習し、又待望するに満足せしめらるゝ以前に於いて若干の時を經過しなければならなかつた。然しながら、經驗の時代は遂に到來した、經驗のみが唯り吾人を啓發す可きことが一般に承認せられた、而して他の科學に於けると等しく農業に於いても亦、唯り經驗によつて取得せられた教課のみが遵守せらる可きである」と説いて居つた。(Tableau, op. cit., p. 1.)。

彼れは又、其の『商業上の富』に於いても、經濟學が、争ふ可らざる眞理として與へられた一定の曖昧なる公理から演繹せられた定理の數學的連系の上にも、亦、乾燥なる計算の上にも基礎を有するものではなく、人の研究及び人々の研究の上に基くものであり、人間の本性、而して又、種々なる時代及び種々なる場所に於ける社會の狀態及び生活が知悉せられなければならぬと説いた。彼れに従へば、吾人は歴史家に諮り、旅行家に問はなければならぬ、吾人は吾人自身を省察しなければならぬ、吾人に諸法規を研究するのみならず、又、是れ等のものが如何に執行せらるゝかを知らなければならぬ、吾人に輸出輸入表を調査するのみならず、又、國家の狀況を知り、家族の内に入り込み、民衆の苦樂を判断し、細部の觀察によつて大原理を確定し、而して絶えず學問を日常の實際生活と比較しなければならぬ。(ibid., t. I, p. xv.)。吾人は又、此の著に據つて、彼れが初めよりして經濟學を以つて統治の學の一部と看做し、政府が其の原理を採用したならば、萬人悉く更らに大なる程度の安樂を享有す可きものと觀て居つたことを知ることが出来る。(ibid., p. xi-xii, p. 13.)。

シスモンディは社會的の制度及び政治的組織が經濟的繁榮の上に及びす可き結果を極めて明確に認めた。彼れを以つて觀れば、英國に於ける穀法の完全なる廢止が果して如何なる結果を生ず可きかと云ふが如き問題は、土壤耕作の諸方法に對して一定の考察を行ふことなくして、單に理論的推理のみによつて決定せらるゝこと能はざるものである。彼れは、英國の如き借地農の國は、波蘭若しくは露西亞の如き、穀物が聰明に農民の上に加へられた二三百の管墾を地主に費さしむるに過ぎざる封建諸國の競争に堪ふことが困難であらうと説いてゐる。(Nouveaux Principes, 2<sup>e</sup> edit., t. I, 1827, p. 257.)

## 五

シスモンディは其の『新原理』に於いて、確定的のものと看做された諸原理の上に疑念を喚起した。彼れは其の單純なることによつて、其の法則の明瞭にして且つ方法的なる演繹によつて、人知の最高貴なる創造物の一たるの觀があつた一個の科學の基礎を動搖せしめた。彼れは宗教に於けると等しく哲學に於いても亦、危險なる企圖として正統説固守(orthodoxie)を攻撃した。同時に彼れは彼れが曩きに政見を同じうせる友人等から分離した。彼れは彼れ等が勸奨せる改新の危險を指摘した。彼れは彼れ等が久しく惡弊として攻撃し來つた多數の制度が有利なる結果を有して居つたことを示した。彼れは經濟學を「爲すに委せよ、而して過ぐるに委せよ」と云ふ最も單純にして一見最も自由なるの觀ある格言に歸することなくして、一再ならず、富の進歩を調整するが爲めに社會的勢力の干渉を懇請した。而して彼れが其の初版上梓の後七箇年にして其の再版を出版せんとせる時、諸事實が彼れの爲めに戰つて勝利を贏ち得たるの觀があると做した。是れ等のものは、彼れの爲し得たよりも遙かに能く、彼れが自己を分離せしめた賢人等は虚偽の繁榮を追求しつゝあつたこと、彼れ等の理論は其の實施せられた總べての場所に

於いて可成りに能く物質的富を増加するに資したのであるが、而も是れ等のものは各個人の爲めに備へられた享樂の量を減じたこと、是れ等のものは富める者をして更らに富ましむるに役立つたが、そは又貧しき者をして更らに貧困に、更らに從屬的に、而して更らに窮乏ならしめたことを立證した。全然期待せられなかつた恐慌は商業界に相次いで起つた。産業と富裕の進歩は斯くの如き富裕を造り出した職工を未曾有の苦難から救ふことがなかつた。事實は公衆の期待にも、亦、哲學者等の豫言にも一致することがなかつた。而して經濟學の學徒が彼れ等の師匠の教訓に對して與へた默信にも拘らず、彼れ等は彼れ等が確立せられたものと考へた準則から甚しく廣く分岐せる是れ等の現象に對する新たな説明を他所に求むるの已むなきに至つた。シスモンディは是れ等の諸説明中に在つて、彼れが豫て與へた所のものは全然結果と一致せることを明かならしめたと信じた。而して彼れは其の著の賣れ行きが更らに速かと爲つたこと、新版の上梓を促した需要とは恐らく斯くの如き一致に歸せられ得るものと做した。(Avertissement sur cette seconde édition, p. i-iii. 彼れは一千八百二十七年の本書再版に先立ち、此の序文を其の前年九月、Revue Encyclopédique. に掲げてゐる)。

『新原理』の再版はツルネー書店から一千八百二十七年に出版せられてゐる。初版に對して加へられた批評は彼れの上に何等の効果なくして終るものではなかつた。彼れは此の書に對して殆んど完膚なき改訂を加へた。彼れは其の讀者の注意を英國の上に集むるに由つて、曖昧の裡に残さる可かりしものを明かにしやうと努めたことが極めて多かつたと自ら記してゐる。(Ibid., p. xvi.)

(附記) 吾人は本解題を草するに當り、『新原理』の再版を自己の所藏本中に看出すこと能はずして、之れを永田清教授から借用した。謹んで同教授に謝意を表す。爰にはシスモンディの處女出版たる一千八百年の『トス

カンの農業略圖』並びに一千八百十九年の『經濟學新原理』初版の表題頁を寫眞版として挿入することとした。

オットー・コンラッド著「經濟學の死罪」

氣賀 健 三

現代の理論經濟學界は何人でも指摘する通り、立場をそれ／＼異にする多數の學者が、或は新説の提唱に於て、或は舊説の修正なり改革なりに於て互に異なつた意見を樹立して居つて、支配的と認められる程の有力な學説は容易に之を見出し難い状態に在る。茲に紹介するコンラッドも亦、學界に新説を提出して従來の經濟學説の改革に資せんことを期した者の一人である。

其序文に記す所に依れば、彼は従來經濟學の進歩を妨げて居た重大なる誤謬から之を救はうと試みたのである。重大なる誤謬とは、勞働、土地及び資本の三生産要素論であつて、コンラッドに依れば、従來經濟學の知識が爾餘の學問程一般的に普及しないのは實に一つには之が爲であり、其結果は更に實際的經濟政策に對してすら殆ど影響を及すを得ざる状態を齎したのである。

コンラッドは先づ第一に經濟の意義を明にする。彼が力を強めて説く所は、經濟が人間の行爲であるといふこと、然かも欲望満足の爲にする行爲であるといふことである。而して欲望満足の爲に外界の手段を必要とする場合、此手段をば經濟の對象と呼ぶ。之に對して人間は經濟の主體である。外界の手段即ち財貨の生産使用を爲すものは飽